

歴史性喪失というアイデンティティー —ジョサイア・コンドルの日本庭園論

渡辺俊夫 WATANABE Toshio

ロンドン芸術大学

日本の伝統工芸を再考するにあたって、日本庭園をとりあげることには抵抗があるかもしれない。庭園は果たして工芸なのでしょうか。1889年(明治22年)に出版された横井時冬の『園芸考』では、タイトルに「園芸」と言う言葉を「造園」という意味で使っており、この頃には、この言葉に関しては、まだ *horticulture* と *garden design* との区別がはっきりと使い分けられていなかったことが判ります。この本は1939年に復刻出版された際に、「日本庭園発達史」と改題され、もうこの時代には「園芸」という単語には「造園」という意味が消失していることが明らかです。横井にとっては、しかし造園は芸のジャンルの一つ、つまり作庭の芸であるという認識があったと思われます。ところが、この本を繙きますと、凡例の第一行に「作庭美術」という言葉を使っております。つまり横井にとっては、造園は芸であり美術でもあったのです。まだこの時期にあつて、こうした用語の意味が確定していなかったことを物語っています。本多錦吉郎も1890年に初版の出た『図解庭造法』のなかで、「庭造ノ術ハ園芸術（ヲルチコルチュール）ノ一科ナレドモ」と横井と同様に定義が揺らいでいる状態をみせながらも、更に「山水庭園（ランドスケープ、ガアズニング）ノ構造ハ美術ノ範圍ニ属シ画学ト建築学トニ関係セルモノ」と言い、造園を美術の一分野として評価しています。

近年盛んになった明治・大正期における「美術」・「工芸」等の用語の定義についての検証のなかでも庭園はあまり取り上げられていないようです。しかし日本庭園の造園の伝統は長い歴史を持ち、磨かれた職人技に頼る一方、茶人などの文化人・パトロンの美意識をも強く反映しています。さらにここ京都において開催されるこのシンポジウムにとって、陶器、染色、織物などと共に、京都文化を代表する庭園というジャンルを取り上げ、日本庭園が外からどう見られたか、ということを明治時代の一つのケース・スタディによって詳細に検討することは、日本の伝統工芸再考のために意義あることではないかと考えます。

そしてこのケース・スタディとしてジョサイア・コンドルの日本庭園論を検討しようと思います。彼は1886年(明治19年)に‘The Art of Landscape Gardening in Japan’という講演をしており、これは同年に出版された *Transactions of Asiatic Society of Japan* に含まれています。そしてその後、日本庭園研究史のなかでも、もっとも著名な出版物である *Landscape Gardening in Japan* を、1893年(明治26年)に、東京の Kelly and Walsh 社から出版しました。更に彼は多くの写真版を含む *Supplement to Landscape Gardening in*

Japan を同年に出版し 1912 年には改訂版が出されています。

日本庭園についての関係文献のなかでも、この本はいまだに最も古典的な基礎文献とみなされています。ただ日本と西欧ではこのコンドルの本の評価に多少のズレがあるようです。西欧では日本庭園史を議論するときには、この著作は必ずといって良いほど言及されます。イギリスにおける庭園史の重鎮であるブレント・エリオット氏も、この本を第一の権威と推奨しています。ただし日本では国際日本文化研究センター教授の白幡洋三郎氏などの例外を除いて、日本庭園史研究者の間では、どちらかという、その重要性があまり認識されていない感があります。西欧では既に 1964 年にはアメリカの Dover 出版社からペーパー・バック仕立ての復刻版が出版されました。それに対して日本ではやっと 2002 年には Kodansha International からハード・バックの復刻版がでました。しかしそれも英文の復刻版であり、これほど翻訳王国といわれる日本にあって、コンドルの生け花の訳本はでていないのに、いまだにこの本の日本語版が出ていないのは不思議です。この一因は昭和時代における江戸庭園の過小評価によると思われる。つまりコンドルの本が築山庭造伝をもとにしているという認識が、作庭記を造庭のカノンとする風潮のなかで、ネガティブな評価を下すことになるわけです。更に、一昔前の日本庭園研究者にとって英語の著作はとっつきにくいものであったのかもしれない。なお、どちらの復刻版も 1912 年に出版された改訂版をもとにしています。

それでは著者であるコンドルとはどういった人物だったのでしょうか。かれは 1852 年にロンドンに生まれ、1920 年に妻くめの死後 2 週間とたたないうちに東京でなくなっています。有名な 18 世紀彫刻家 Louis François Roubiliac の血を引くと言われ、祖父の Josiah は Dictionary of National Biography にもエントリーがあり、妻による伝記も出版され、インドに関する著作も残し、詩人 Robert Southy のサークルにも属したかなりの文化人です。ロンドンの文化的な中流家庭のなかで育ったと思われます。ロンドン大学教授にもなり、建築雑誌 *The Architect* の主幹でもあった親戚の Thomas Roger Smith や有名な建築家 William Burges のもとで建築修行を行い、1876 年には王立建築家協会からソーン賞を授与されたりします。しかし実際にイギリスで自らの建築活動を行うことも無しに、同年にはお雇い外国人として日本に招聘され、翌年一月に来日します。その後多くの建築設計を行うだけでなく、建築教育にも携わり大きな成果をあげています。

しかし彼はまた非常な日本文化愛好家でもありました。河鍋曉齋のもとで日本画を習ったことは良く知られており、曉英という名前まで授かっています。演劇も好み、舞踊家である妻のくめと一緒に和服姿で舞踊劇「京人形」を演じている写真も残されています。なんとコンドル自筆による三遊亭円朝の落語のローマ字記述本さへ早稲田大学図書館に残されています。その他日本建築は勿論のこと、河鍋曉齋について、そして生け花についても著作を残しています。そういった中でコンドルが日本庭園についても著作を残したことは

不思議ではありません。

それではコンドルはどのような日本庭園観を持っていたのでしょうか。そしてそれがどのようにこの *Landscape Gardening in Japan* という本に反映されているのでしょうか。まず、第一に指摘できることは、*Supplement to Landscape Gardening in Japan* における図版の選択が、我々が見ると偏っているように感ぜられることです。先ほどすでに述べましたように、今日においても日本庭園に関しての基本文献とされているこの本も、これを詳細に検討してみると、我々が今日考える日本庭園についての常識といったものからは、かなりかけ離れた選択であることに気がつかされます。例えば、現在では日本庭園の代表的な例として、どちらも京都に存在する桂離宮と龍安寺の庭園の二つを挙げるのが一般的ですが、なんとコンドルの本にはこの二例の図版がありません。写真図版の大部分は東京の庭園で、青森、新潟から鹿児島庭園までもが含まれていますが、京都の庭園に関しては、御所、金閣寺、銀閣寺（2枚）そして西本願寺の大書院虎溪の庭および滴翠園の合計6枚しかありません。なおコンドルは図版解説では東本願寺と間違えており、名前も Tokusui-in としていますが、図版写真をみれば、滴翠園であることが判ります。

どうしてコンドルはこうした選択をしたのでしょうか。これはコンドルが日本の同時代の庭園観を、この選択に色濃く反映させたためと思われます。序文のなかで彼は使用した文献リストをきちんと掲げています。19世紀出版のものが大部分ですが、先に触れた横井時冬の『園芸考』や、本多錦吉郎の『図解庭造法』なども含まれています。なお、1999年の小野健吉氏および Walter Edwards 氏による研究では、有名な1735年出版の『築山庭造伝（前編）』に記されているだけで図解の無い役石の実態を調査するために、なんとコンドルの本にのせられた役石の図解によって明らかにしようとしています。つまり現在では失われてしまったこれらの石の意味が明治時代にはまだ理解されており、コンドルがそれを忠実に図解に再現したと解釈されるからです。現代の我々の日本庭園観と明治時代のそれとの大きなギャップについては、白幡洋三郎氏の名著『大名庭園』が、詳しく検証してくれています。つまり、龍安寺に代表される「石庭の理想」と桂離宮に代表される「王朝風の理想」はそれぞれ20世紀庭園史研究の二人の重鎮、重森三玲^{おさむ}および森蘊によって日本庭園史の最高峰として高く評価されることとなったのです。それと同時に江戸大名庭園の評価が下がり、現代の我々もこの美意識を受け継いでいるのです。私は更にブルーノ・タウトなどによって日本にもたらされたモダニズムの美意識、あるいは、庭園経験における写真の重要性和、そうした写真が庭園をオブジェ化することによる大名庭園にみられる庭園のパフォーマンス的な要素の喪失なども、こういった傾向に拍車をかけたと解釈します。白幡氏もいわれるように、明治の日本庭園は江戸の大名庭園の後継者でした。そしてコンドルの *Landscape Gardening in Japan* のメイン・テーマは大名庭園に基づいた作庭技術の解説に他ならないのです。

コンドルの日本庭園観を分析するための第二の問題点として、彼にとっての日本庭園の本質と思われる三つの要素を検討してみましょう。まず第一にコンドルは日本庭園は日本風景そのものの表象であるといっています。第二に日本庭園は何よりもまず美術であると強調しています。そして第三には日本庭園の精神性については一切言及していません。

それではこれを一つずつ検討してみましょう。コンドルはイントロダクションの最初にこう言っています。

A garden in Japan is a representation of the scenery of the country, though it is essentially a Japanese representation. Favourite rural spots and famous views serve as models for its composition and arrangement.

つまり日本の風景のなかでも好ましいと思われているもの、有名な景観などをモデルにして、日本風にはあるが、それを表現していると言うのです。抽象的なコンポジションではなく、あくまでも自然風景の再現を試みているという見方です。

Kodansha International から出版された復刻版の序文のなかで Azby Brown は、これは言い過ぎであると批判しています。しかしこれはコンドルが、無秩序で気まぐれと当時思われていた日本庭園にも手続きの規定があるということを強調しようとしたためではないか、と言っています。

コンドルが強調した点は、日本国民は身分の高低に関わらず、世界で類を見ないほどに自然を愛好しているということです。ただし日本の「自然」表現は西洋のような写実主義ではなく、それなりの規則に従って表現されているというわけです。そしてそれを正当付けるために、ギリシャ美術の例をひいています。ギリシャでも日本でも女性の美しさは、既に確立された理想のタイプがある。そして日本の自然表現も同じようなルールに従っているというわけです。ですから我々西洋人にとって判りにくい規則に従っていても、自然表現に徹していることに変わりはないという論旨です。日本人と自然の親近性については何回も繰り返し触れています。

コンドルにとっての日本庭園の第二の特徴は、それが美術であるということで、何度も何度も強調しています。

It is the *artistic* aspect of Japanese gardens, as shown in the methods of design employed, which will be mainly considered in the present treatise.

ここで *artistic* という言葉は原文でイタリックになっており、コンドル自身が強調して

います。つまり日本庭園を論ずるにあたって、美的な点を中心に分析したいといっています。そして序文の最後に、日本庭園では、植物は自然の法則に従わずに配置されていることは、ほとんどないと述べた後で、結論として次のように言っています。

This treatment of a landscape garden, not merely as an artistic medley of pretty contours and choice vegetation, but as a single composition, abounding in suggestions of natural spots and favourite fancies, is one which seems to give to the Japanese art a rank and importance unsurpassed by any other style.

まず日本の庭園デザインはばらばらではなく、自然の法則に従った、統一された一つの構図によっていることを強調しています。そして、これこそは日本美術に、他の様式のどれよりも高いランクと重要性を与えているとまで言い切っています。つまり、ここでコンドルは日本庭園をアートとして認めているだけではなく、日本美術そのものは、世界最高のものであるといっているわけです。

さて、コンドルにとっての日本庭園の第三の特徴としては、精神性を重要視していないことがあげられます。日本庭園の技術について等は詳しく述べていますが、いつも中心的な観点は美です。実は序文の中で一箇所だけ *peaceful* という言葉がつかわれているところがあります。

Other sentiments, such as peaceful retirement, modesty, prosperity, old age, and connubial felicity, have been attributed to famous historical examples.

つまり他の人達がこういっているということで、しかも *peaceful* という言葉は、正確には、*garden* の形容詞ではなく、*retirement* の形容詞ですので、やや間接的な表現になっています。1886年の講演でも、日本庭園における神秘的な意味 (*occult meanings*) の可能性を否定してはいませんが、その重要性を過小評価し、日本の歴史や哲学の造詣の深い人にはわからないものであると簡単に片付けてしまっています。コンドル自身はこうした日本庭園の精神性にフォーカスできる機会にも、結論としては *familiar sentiment* 馴染み深い情緒を伝える点を強調しています。

こうした日本庭園の精神性の過小評価は、1928年にイギリスの Studio 社から英語で発行された原田治郎の *The Gardens of Japan* とは全く異なるものです。原田にとっては日本庭園の精神性こそが日本庭園の中心的課題でした。

では何故コンドルがこのような態度をとったのでしょうか。まずこれにとって重要なコンドルの特性を検討します。第一は彼が審美主義 *Aesthetic Movement* の環境に育ったこ

と、そして第二は彼がやはり当時のイギリスにおけるジャポニズムにみられる日本観を示していることを挙げたいと思います。

コンドルが美を重要視したことは、かれの建築教育をみても明らかです。彼は繰り返し繰り返し建築は美術であることを学生たちに言い聞かせています。さらに土曜日には建築科の学生たちと一緒にスケッチをしに出かけたりしています。1877 年来日翌年に始められた北海道開拓使物産売捌所のインテリアのデザインなどは、まさに当時のイギリスの Aesthetic Movement の典型的な例ともいえます。更にこれのデザインは日本のモティーフなども取り入れられたジャポニズムのインテリアとなっています。

彼は当時のイギリス人としては最も日本文化通であり、日本人と正式に結婚したり、日本画を嗜んだりしていましたが、それでも彼の日本美術観は当時のイギリス・ジャポニズムのとった態度を反映しています。つまり審美主義者として、日本の美を評価するため、どうしても美が日本文化のもっとも重要なポイントになってくるわけです。

最後に、ではこの本の目的はなんであったのかという点を検討してみましょう。実はこの本は日本庭園を紹介し分析すると共に、いかにしてそれをデザインすることができるかという造園入門書の性格を帯びています。つまり、西洋人に対して、自分の日本庭園を作ることすをすすめる点です。しかし、ここでひとつ指摘したいことは、コンドルがどうやって文化的には非常に異なった日本庭園を西欧に作るということを正当化しているかという点です。彼自身はこう言っています。

…the writer's task is partly accomplished if he succeeds in showing that beneath the quaint and unfamiliar aspect of these Eastern compositions, there lie universally accepted Art truths.

つまり普遍的な美の追求のためであるというわけですが、そこで東洋的な要素に対しては、読者の偏見を先取りしようとしているとはいいながらも、quaint and unfamiliar 風変わりで見慣れないとやや否定的な言い方をしています。もう一つの引用文では次のように言っています。

Robbed of its local garb and mannerisms, the Japanese method reveals aesthetic principles applicable to the gardens of any country, teaching, as it does, how to convert into a poem or picture a composition, which, with all its variety of detail, otherwise lacks unity and intent.

ここでも、どの国でも通用する美の法則を日本庭園に見出しており、それに対して、日

本的な要素には local garb and mannerisms ローカルな装いと癖といった否定的な響きを持った言葉を用いています。

ここで何が起きているかという、日本庭園の普遍的な美を強調するために、日本庭園に見られる、日本固有の史的・文化的要素がないがしろにされています。つまり西洋人が日本庭園から学ぶことは、構図など抽象的な美のあり方であって、日本と史的・文化的にハッキリと判ってしまう要素を取り入れることではないということです。美さへ考慮されれば、その他のことはあまり重要ではないということです。こうした考え方は西欧モダニズムの日本文化に対する態度にも表れていくということを、別の場所で「光琳とモダニズム」というテーマで扱いましたので、ここでは詳しく述べません。コンドルのこの著作は、1860年代から1890年代にかけて広まった審美主義的ジャポニズムの最後の時期を代表するものと思います。

ただコンドルのこの本は西欧のジャポニズム的な日本観だけを反映したものではありません。既に言及しました横井時冬の『園芸考』では第一篇の第一行冒頭でも「園芸の美術たるや」と、庭園の美術性を強調しています。更に、附言の中で、「本邦作庭の」「天然の風景を写す」といっており、^{日本人は}「我は常に自然を好む」ともいっています。また日本庭園の精神性も強調していません。つまりコンドルにとっての日本庭園の三つの特徴、自然の強調、美の強調、そして精神性を過小評価することを、この本も共有しています。ただ横井の文は長いものではなく、コンドルがどれほど横井あるいは、他の日本の著者たちに依存しているかは、今後さらに調査する必要があります。

この著作においてコンドルは、ヨーロッパやアメリカの読者たちにも、日本庭園をデザインすることを薦め、これを正当化するために、日本固有の史的・文化的要素を過小評価し、日本庭園の普遍的な美を強調しています。つまり日本庭園を西洋でデザインする時は、日本庭園のローカルな特徴は取り払い、その示す美の原則にのみ従えとしています。皮肉なことに日本庭園はその歴史性を喪失することによって、西洋においてそのアイデンティティーを確立することになります。コンドルの日本庭園論は19世紀ばかりではなく、21世紀における日本の工芸・デザインの国際的受容のパラダイムの一つを提供してくれています。

追記

シンポジウムの当日、私の報告に対して片平幸氏より詳細なコメントをいただいたうえ、そのテキストを後にお送りいただいた。氏のコメントは私の報告を丁寧に解説されたのにとどまらず、幾つかの有意義で重要な提言をされているため、追記として片平氏のご質問、解釈に対する私なりのコメントをここに記したい。この対話を判りやすくするために、上記の報告本文はシンポジウム発表原稿を

ほとんど変更しなかった。

<コンドルの図版の偏りについて>

片平氏の指摘されたように龍安寺や桂離宮が既に江戸時代に「名園」として位置づけられていると言う点には異議はない。私の言いたかったことは、この2庭園を他のどの名園よりもずば抜けて、ほとんど排他的に日本庭園史の最高峰とする見方は重森・森の著作活動以後に一般化したという点である。なお桂離宮評価の変遷に関しては、井上章一著『つくられた桂離宮神話』に詳しい。20世紀後半の通史タイプの出版物で日本庭園の挿図が1、2点しかない場合は、この二つの庭園以外の例が掲載されることはほとんど無い。江戸期においては、例えば西芳寺のいわゆる苔寺庭園の名声もこの2例に劣らず高かったと思われるが、更に専門家のご意見を伺いたいところである。片平氏は重森・森ともに言葉によってこの2例を再発見したと言われるのは、確かに頷ける。私はそれに加えて近代写真の効用も重要であったと考える。氏は更に当時の京都の庭園の劣悪な保存状態の問題を提議されているが、この指摘は重要であり、今後の課題としたい。コンドルおよび同時代の価値観が京都の庭園を重要とみなしていなかったとは言い難いという氏のコメントには私も賛成であるが、現代の私達の極端な京都偏重といった感覚と比べて当時は東京の庭がもっと評価されており、京都の重要性も現代に比べれば、より相対化されていたのではないだろうか。

<片平氏の新しい提言>

氏は私の触れなかった三つの点を補充されている。第一はコンドルの当時のイギリス風景式庭園の状況への批判である。これはコンドルが日本庭園と比較しながらの説であり、コンドルが日本はイギリスよりも優れているという評価を与えており、重要な指摘である。もっとも彼自身結構左右対称的なイタリア風庭園をデザインしていたようである。第二の点は、「型」の問題である。いままで日本ではコンドルが秋里などの真行草を受け売りしたとして、コンドルの「型」の議論を低く評価することが多かった。これに対して片平氏は、コンドルのテキストを更に精読され、コンドルは「型」の重要性を説きつつ、「型」の逸脱を重要視したと指摘されている。第三の点は、コンドルの文章が中国の道教および儒教思想を想起させるという示唆である。氏はこれはコンドルが、イギリスで得たシノワズリーの知識か、江戸期の書物から学んだのどちらかの可能性があるとされている。私は後者の方が可能性が高いと思う。特に明治になってからでも、このテーマに関連した書物が出版されていたと思われるからである。

<日本庭園の史的・文化的要素>

片平氏はコンドルは歴史に興味を示し、歴史性もまた日本庭園理解に必要な要素とみなしていたと指摘されている。これには私も異論が無い。私の言いたかったことは、造園入門書としての役割の範囲内である。西欧のジャポニスムには二つの面がある。一つは、日

本の知識なり物品なりをただひたすらに集めようとするもの、もう一つは、自身の作品・生活様式などに、日本の要素を取り入れようとするものである。つまり、日本にある日本庭園を知的に理解しようとするためには、その歴史を知る必要がある。しかし、西欧で日本庭園を作庭しようとするならば、日本固有の史的、文化的要素を犠牲にしてでも、日本庭園の普遍的な美を取り入れるべきという態度をコンドルが示したということである。